ハートに火をつけて♥
森本あき
illustration
三栗チコ

ハートに火をつけて

《立読み版》

森本　あき

イラスト　三栗　チコ

プロローグ

「そっちだ！」

「追いかけろ！」

わめき声とともに、足音高く走る人の群。それについて行こうと、井上知彦（いのうえともひこ）は必死に足を動かした。ここで置いていかれでもしたら、あとからまた、何を言われるか分からない。

だけど、こんなにがんばっているのに、集団との差は開くばかり。歩いているのか走っているのか、分からなくなった時点で、ついに知彦はあきらめた。だいたい、自分一人いなかったからといって、別に大勢（たいせい）に影響はない。

荒く息をつきながら、知彦は地面に腰を降ろす。

「ぼくに捕まえられるわけがないし…」

ここで少々休んでいてもかまわないだろう。そう思っていたら。

「おやおや、またきみかい？　奇遇だね」

上から、声がした。驚いて振り仰いでも、だれもいない。それはそうだ。頭上には、明るく輝いている月以外には、何もない。

じゃあ、この声は？

「毎回毎回思うけれど、どうして、こう警察というのは、役立たずをクビにしないのだろうか。これじゃあ、税金泥棒とののしられても仕方がないね」

真上（まうえ）のわけがない。きょろきょろとあたりを見回すと、ちょうど塀の上に、周りにとけこむかのようにして立っている人影が見えた。

「動くな！」

知彦は腰から銃を取り出そうとして、いつもの位置にないことに気づく。ふと相手を見ると、にやにや笑っている様子。顔は上半分がマスクのようなもので覆われていて、目は見えない。だけど、分かる。あいつは、絶対に笑っているのだ！　それも、バカにしたように。

「ドルフィン、今度こそ、終わりだ」

「『ぼくに捕まえられるわけがないし』。ちゃんと分かってるじゃないか」

「いつから聞いてたんだ！」

さっき、自分が言ったことを、寸分たがわず、その上、結構似ている物まねまでされて。知彦は、怒りと恥ずかしさに真っ赤になる。ドルフィンは肩をすくめた。

「聞いていた、というか、ずっとここにいただけだ。おまえの仲間の能なしどもは、見事、ダミーを追いかけてる。ここから立ち去ろうとしたときに、誰かが立ち止まったから、おや、割合骨のあるやつがいるじゃないか、と思ってみれば、またもや、おまえ。その上、ママー、おうちに帰りたい、ってか？弱音を吐くようなやつは、警察官になんかならなければいいんだ。おっと、もうしゃべっている時間がない。もうすぐ、戻ってくるからな」

何が、とは言わずに、ドルフィンは知彦に背を向けた。知彦はあせって呼び止めようとする。

再三再四、逃がすようでは、本当にクビだ。

「待て！　止まらないと撃つ！」

「どうやって？」

ドルフィンは唇の端を吊り上げた。さっきよりも、もっとバカにしたような笑み。その手には、拳銃が握られている。

「本当に警察とは思えないね。背後の気配にまったく気づかないなんて」
「ぼ、ぼくの銃！」
「もちろん、そうだよ」
ドルフィンは当然、という顔でうなずいた。ということは、知彦が一休(ひとやす)みしている間にこっそり背後に近づいて腰から銃を取り、音も立てずに塀の上に登ったというのだろうか。
神業(かみわざ)、といわれるドルフィンの腕前(うでまえ)。それを思い知らされたようで、知彦の全身に寒気(さむけ)が走った。その気なら、殺されていたに違いない。それも、何も分からないうちに。
ドルフィンが腕を上げ、知彦に狙いを定めた。微動だにしないその腕に、完全なる自信がうかがえる。きっと、一発で殺せるように、寸分たがわず急所を狙っているのだろう。殺される前に逃げなければ、と思うのに、足が一歩も動かない。恐怖に対面したとき、人は動けなくなるものだ、と体で分かった。息さえも、できない。
「言い訳は自分で考えるんだな」
そう言うなり、銃が火を噴いた。サイレンサーも何もついていないため、夜気を引き裂いて音が反響する。キーン、という耳鳴りと、微かな痛み。ああ、死ぬんだ、とそう思って。

心臓を押さえても、痛みがない。血すら出ていない。すわ頭か、と考えて、頭なら、何も考えられるはずがない、と思い直す。じゃあ、どこを撃たれたんだろう。

「またな」

ドルフィンが銃を投げ返して、それから、一枚の紙を投げた。どこをどうしたら、そういうことができるのか。その紙は、すっと知彦の背広のポケットに吸い込まれる。

音もなく、ドルフィンの姿が消えて。しばらくたってから、車のエンジンの音が聞こえた。

追いかけなければ、と思うのに、足が動かない。恐怖のためか、安堵のためか、体が細かく震え始める。

「おい、井上！　ドルフィンは！?」

「こっち、来なかったか！?」

またもや、どやどやと足音がして、先輩刑事たちが戻ってくる。

「ちくしょー、つかまえてみれば、人間そっくりの機械だし！　あいつは、どうして、あんなもん作れんだ！　どこで機械と入れ替わったかすら分かんなかったじゃねえか。おい、井上、どうした！」

「撃…たれました」

先輩たちが現れてくれた安心感も手伝って、そう言うなり、知彦は気を失った。驚いた周りの連中の声なんて、まったく聞こえなかった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

ハートに火をつけて

《立読み版》

発行日　２０１２年５月２５日
著者名　森本　あき
イラスト　三栗　チコ
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Aki Morimoto 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。